

看護婦・看護学生のGSE S得点と 臨床経験年数との関連

石田 貞代¹⁾・望月 好子²⁾

1) 静岡県立大学短期大学部

2) 小田原高等看護専門学校

The Relationship between Nurses' and Nursing Students'
General Self- Efficacy Scale Scores and their Working Experiences

ISHIDA, Sadayo¹⁾

MOCHIZUKI, Yoshiko²⁾

MOCHIZUKI, Hidemi

1) Shizuoka Prefectural University, Junior College

2) Odawara College of Nursing

要 旨

本研究は、看護婦・看護学生の一般性セルフ・エフィカシーを坂野らが開発した一般性セルフ・エフィカシー・スケール(GSE S)を用いて測定し、看護婦・看護学生のGSE S得点と臨床経験年数との関連を明らかにすることを目的とした。

看護婦190名と看護学生76名の合計266名に対し、GSE Sを用いて質問紙調査を実施した。その結果、次のことが明らかになった。

1. 看護婦のGSE S得点(M=7.32, SD=3.57)は一般女性のGSE S得点(M=9.12, SD=3.93)に比べて有意に低かった($p < 0.001$)。
2. 看護学生のGSE S得点(M=平均8.05, SD=4.05)は一般学生のGSE S得点(M=6.58, SD=3.37)に比べて有意に高かった($p < 0.05$)。
3. 看護婦グループ間(臨床経験1年目、3年目、5年目以上の看護婦)では経験年数が多いほどGSE S得点が高く、5年目以上の看護婦のGSE S得点(M=7.88, SD=3.77)は1年目の看護婦のGSE S得点(M=6.42, SD=3.44)に比べて有意に高かった($p < 0.05$)。
4. 看護学生のGSE S得点はどの看護婦グループのGSE S得点よりも高く、とくに1年目の看護婦のGSE S得点に比べて有意に高かった($p < 0.05$)。

以上より、看護婦として勤務する初期の段階で一般性セルフ・エフィカシーが低くなることが示唆された。これが高められると課題への積極的な取り組みが促されるため、看護教育において一般性セルフ・エフィカシーを高めるような働きかけが重要であると考えられる。

キーワード：看護婦・看護学生、セルフ・エフィカシー、GSES、臨床経験年数、看護教育。

．はじめに

セルフ・エフィカシーは、Bandura の理論により提唱された行動特性を示す概念の一つで、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信であり、自己効力感または自己遂行可能感と呼ばれるものである。そして、多様な行動変容のプロセスを合理的に説明することができ、測定および操作が可能で、操作によって行動変容を促すことができるという特徴をもつものである¹⁾。

最近では、臨床心理学の分野における認知行動療法の中で活用され、慢性疾患患者などへの認知行動的介入の結果から、対象者のセルフ・エフィカシーが向上するよう操作することで、望ましい行動変容へと導く可能性があることが示唆された²⁾³⁾。

認知行動療法はその効果が確認されるにしたがい、健常者、障害児、社会的不適応等の教育関連領域でも幅広く活用されている⁴⁾。山本は看護学生のGSES得点とセルフ・イメージとの関連を検討し、自己に対して肯定的なイメージをもっているものほどセルフ・エフィカシーが高いことを明らかにし、看護教育の領域におけるセルフ・エフィカシーのさらなる活用の可能性を示唆している⁵⁾。

以上を総括すると、看護の基礎教育や臨床の場においても、看護婦や看護学生のセルフ・エフィカシーが向上するように操作できれば、対象者一人一人が自己成長し、より望ましい行動変容へとつなげることが可能ではないかと考える。

今回の研究ではその前段階として、看護婦・看護学生のもつセルフ・エフィカシーがどのようなものであるかを測定し、一般成人女性（以下「一般女性」と略記する）や一般大学生（以下「一般学生」と略記する）との比較においてその特徴を知ることが必要と考えた。また看護婦・看護学生のセルフ・エフィカシーと臨床経験年数との間にどのような関連があるのかを明らかにする必要があると考えた。

一般性セルフ・エフィカシー・スケール（以下「GSES」と略記する）は、個人が日常生活の中で示す一般的なセルフ・エフィカシーの強さを測定する尺度として作成され、信頼性、妥当性について検証されたものである。そこで本研究においてもGSESを用いて看護婦・看護学生の一般性セルフ・エフィカシーを測定することが有用であると考えた。

．目的

本研究の目的は、看護婦・看護学生の一般性セルフ・エフィカシーを坂野らが開発したGSESを用いて測定し、一般女性と一般学生との比較においてその特徴を明らかにすることである。また、看護婦・看護学生の一般性セルフ・エフィカシーと臨床経験年数との間にどのような関連があるのかを明らかにすることである。

・研究方法

1．調査対象と期間、方法

S 大学院勤務の看護婦 1 年目 57 名・3 年目 67 名・5 年目以上 66 名の計 190 名と、同大学病院付属看護専門学校の 3 年生 76 名の合計 266 名に対し、10 月に G S E S を用いた質問紙調査を実施した。

なお、看護学生は患者への援助体験が多いと思われる臨床実習中の 3 年生のみを対象とした。

看護婦に対しては、各所属の病棟ごとに婦長に依頼し、1 週間の期間を置いて回収する留置法を用いた。看護学生に対しては、教室において全員同時に配布し、回答後その場で回収する集合調査を行った。

2．質問紙

セルフ・エフィカシーは自己効力感または自己遂行可能感と呼ばれ、当面の行動選択に直接影響をおよぼすレベルと長期的な行動選択に影響をおよぼすレベルとが考えられている。

坂野らは、特定の行動の選択場面だけでなく、一般化したレベルでの行動変容をも把握するために、個人が日常生活の中で示す一般的なセルフ・エフィカシーの強さを測定する尺度として G S E S を作成した⁶⁾。

Kuder - Richardson の 21 式による信頼度係数は $= .81$ 、再テスト法による相関関係は $= .84$ で、信頼性が高いことが報告されている^{7) 8)}。

G S E S は 16 の質問項目からなる 2 リカートスケールである。因子分析により、「行動の積極性」「失敗に対する不安」「能力の社会的位置づけ」の三因子が抽出されている(表 1)。

表 1 G S E S の因子分析結果

No.	項 目	負荷量
第 1 因子 行動の積極性 (7 項目)		
8	ひっこみじあんなほうだと思う。	R .71
15	積極的に活動するのは、苦手なほうである。	R .60
13	どんなことでも積極的にこなすほうである。	.51
6	何かを決めるとき、迷わずに決定するほうである。	.34
10	結果の見通しが見つからない仕事でも、積極的にとりくんでゆくほうだと思う。	.34
5	人と比べて心配性なほうである。	R .32
1	何か仕事をするとき、自信を持ってやるほうである。	.30
第 2 因子 失敗に対する不安 (5 項目)		
4	仕事を終えた後、失敗したと感ずることのほうが多い。	R .59
11	どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある。	R .58
7	何かをするとき、うまくゆかないのではないかと不安になることが多い。	R .56
2	過去に犯した失敗や嫌な経験を思いだして、暗い気持ちになることがよくある。	R .48
14	小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。	R .37
第 3 因子 能力の社会的位置づけ (4 項目)		
3	友人より優れた能力がある。	.65
12	友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある。	.63
9	人より記憶力がよいほうである。	.40
16	世の中に貢献できる力があると思う。	.33

上記表中、R は反転項目であることを示す。

本研究では坂野らの作成した質問紙を用い、対象者に対して、16項目が今の自分にあてはまるかどうかを「Yes」または「No」のどちらかで回答してもらった。対象となった看護婦・看護学生のGSESの特徴を知るために、坂野らがGSESを作成する際に対象とした健康な一般女性および一般学生のデータ(表2)と比較した。

表2 一般女性・一般学生のGSES得点

	サンプル	平均	標準偏差
一般女性	149	9.12	3.93
一般学生	278	6.58	3.37

文献1)より一部改変

比較対象とした一般女性149名の平均年齢は36.07歳(標準偏差=12.01)(以下「SD」と略記する)で、一般学生278名の年齢は18~21歳であった。

・結果

1. 対象者の年齢

対象者のうち、看護学生76名の平均年齢は20.5歳、看護婦190名の平均年齢は23.5歳、看護学生と看護婦をあわせた全対象者266名の平均年齢は22.7歳であった。

2. 看護婦・看護学生のGSES得点

全対象者のGSES得点は平均7.53(SD=3.73)で、看護婦のGSES得点は平均7.32(SD=3.57)であった。

看護婦と一般女性における得点の平均値の差をt検定により比較した結果、看護婦のGSES得点は坂野らの示した一般女性の得点9.12(SD=3.93)に比べて有意に低かった($p < 0.001$)(図1)。

看護学生の平均は8.05(SD=4.05)であった。看護学生と一般学生における得点の平均の差を比較したところ、看護学生のGSES得点の平均は坂野らの示した一般学生の平均6.58(SD=3.37)に比べて有意に高かった($p < 0.05$)(図2)。

3. GSES得点と臨床経験年数との関連

対象者を臨床経験が1年目の看護婦(以下「1年目」と略す)、3年目の看護婦(以下「3年目」と略す)、5年以上の看護婦(以下「5年以上」と略す)と臨床経験のない看護学生の4つのグループに分類した。そして一元配置分散分析によりグループごとのGSES得点の平均を比較した。GSES得点は平均で、1年目は6.42(SD=3.44)、3年目は7.52(SD=3.32)、5年以上は7.88(SD=3.77)であった。

その結果、1年目と3年目、3年目と5年以上の比較では有意差は認められなかったが、1年目と5年以上では、5年以上の看護婦の方がGSES得点の平均は有意に高かった($p < 0.05$)。

一方、看護学生のGSES得点の平均は看護婦のどのグループよりも高く、特に1年目のグループとの比較で有意な差がみられた($p < 0.05$)(図3)。

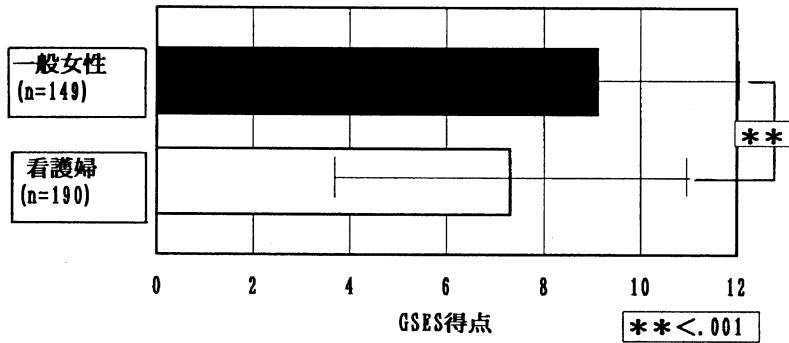


図1 看護婦と一般女性のGSES得点の比較

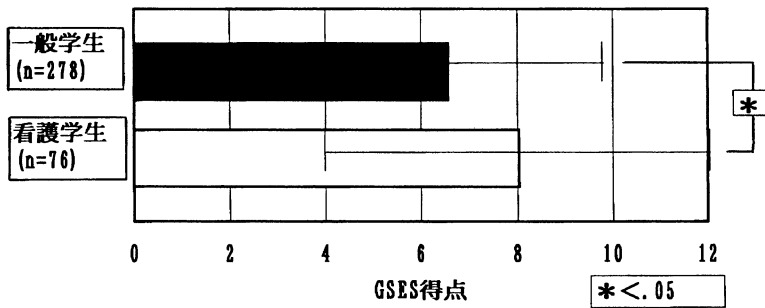


図2 看護婦学生と一般女性のGSES得点の比較

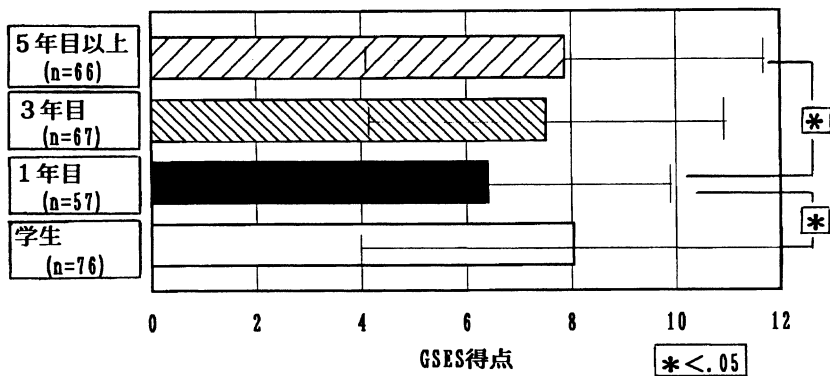


図3 GSES得点と臨床経験年数との関連

・考察

1. 看護婦のGSES得点の特徴

セルフ・エフィカシーは、自然発生的に生じてくるのではなく、

- 1) 自分で実際に直接体験し、成功体験をすること - 遂行行動の達成 -
- 2) 他人の行動を観察し、代理的経験をすること - 代理的経験 -
- 3) 自己強化や他人からの励ましや、説得を受けること - 言語的説得 -
- 4) 生理的な反応の変化を体験してみること - 情動的喚起 -

といった情報源を通じて個人が自ら作り出していくものである⁹⁾。そして、セルフ・エフィカシーの高低は、社会的活動の有無により影響を受けている¹⁰⁾。

有職者である看護婦のGSES得点が一般女性に比べて低かったのは、その社会的活動の内容が専門職としての能力と責任を問われるものであり、臨床経験の中でセルフ・エフィカシーが高まるような成功体験を積み重ねることは難しいと思われるため、このような結果を示したと考えられる。しかし、看護婦の平均年齢23.5才に比べ一般女性の平均年齢が36.7才であったことから、平均年齢の違いが変動因子の一つとなったことが考えられ、比較対象の選定には課題が残った。今後は同年代の一般女性との比較から、看護婦集団のもつ特徴を考察してゆく必要があると思われる。

2. 看護学生のGSES得点の特徴

看護学生と一般学生との比較においては、看護学生のGSES得点が有意に高かったが、これは臨床実習における活動が質の高い社会的活動となり得ていることによると考えられる。また、専門化された看護系の学生は人文系の学生に比べて高い職業レディネス（職業選択への心理的準備状態）を持つために、学生生活への満足度もより高くなる¹¹⁾ことから、専門知識や技術を習得しているという体験により、さきに述べた3因子の1つである「能力の社会的位置づけ」という側面が強化されていることも推測される。これを確認するためには因子分析を行い、看護学生と一般学生の因子ごとの比較をする必要があると考える。

3. 看護婦・看護学生間のGSES得点の比較

卒後の経験年数別の看護婦の特徴の中で、1年目の看護婦が直面するリアリティショックが大きいと、GSES得点も低い結果となったと思われる。

さらに3年目では、ライフサイクルにおける1つの転機でもあり、結婚・育児など家庭生活と仕事の両立や、職場における責任の増大などで、看護の継続意志を含めて不安定な状態になりやすい¹²⁾ことが考えられる。しかし、1年目のリアリティショックの段階を越え、この時期の看護の実践能力は確実に高まっていることが推察されるため、セルフ・エフィカシーも高まっていると思われる。

1年目と5年目以上との比較では、5年目以上の看護婦のGSES得点が有意に高かった。これは5年目以上の看護婦は、一般に中堅として位置づけられ、後輩指導や学生指導などの役割も大きくなり、それらが学習や仕事への意欲を高め、自らの能力に対する自信となっていることが考えられる。

看護学生のGSES得点はいずれの看護婦グループよりも高かった。3年次には、学校生活に満足し自己成長感も高まり、ささやかな看護職への自信がもてるようになる¹³⁾といわ

れ、学生生活の中でもっともセルフ・エフィカシーが高まる時期と思われる。中でもこの調査が行われた10月は臨床実習の後半の時期にあたるため、精神的にも落ち着き、リアリティショックが大きい1年目の看護婦よりも得点が高くなったと考えられる。

看護学生と看護婦とでは社会的位置づけにおいて学生と社会人という大きな違いがあること、また横断調査で得られたGSES得点を同一線上で比較するにはある種の限界があることを考慮しなければならない。しかし、学生から社会人となる過程においてセルフ・エフィカシーが低くなることが示唆されるため、この時期にどのように働きかけていくか、卒後教育のみならず、基礎教育も含めて今後さらに検討していくことが必要であると考えられる。

セルフ・エフィカシーが高められると、課題・事態への積極的取り組みが促進され、困難に直面してより大きな努力をより長く続けるとともに、予期的不安と抑制が低減され回避行動や防衛行動が消去される¹⁴⁾と言われ、セルフ・エフィカシーを高めるような働きかけが重要であると考えられる。

4. 課題

佐伯らは、不安の高い看護学生に対するストレスマネジメント教育を実施するにあたり、MAS（顕現性不安尺度）およびSTAI（状態不安尺度）を用いて不安状態を査定し、ストレスマネジメントプログラム実践の報告をしている¹⁵⁾。一方金は、セルフ・エフィカシーが高いものほどストレス反応が小さいことを報告している¹⁶⁾。以上の報告から、今後佐伯らが用いた尺度にセルフ・エフィカシーを加えて対象も看護職全般に広げることで、ストレスマネジメントを看護教育の場において効果的に活用できるのではないかと考える。

今後はセルフ・エフィカシーと関連性が高いと思われる概念、例えばセルフ・エスティーム、自己意識、自己教育力、看護職アイデンティティーなどとの関係を明らかにすることが必要と思われる。さらに看護教育の場面で看護婦や看護学生のセルフ・エフィカシーが向上できるように操作し、対象者一人一人が自己成長し、より望ましい行動変容へとつなげていけるような取り組みが必要と考えられる。

・ 結論

看護婦190名・看護学生76名のGSES得点を測定し、次のことが明らかになった。

1. 看護婦のGSES得点は一般女性に比べて有意に低かった。
2. 看護学生のGSES得点は一般学生に比べて有意に高かった。
3. 看護婦グループ間では、経験年数の多いほどGSES得点が高く、5年目以上の看護婦のGSES得点は1年目に比べて有意に高かった。
4. 看護学生のGSES得点はどの看護婦グループよりも高く、とくに1年目に比べて有意に高かった。

看護学生が看護婦として勤務する初期の段階でセルフ・エフィカシーが低くなることが示唆された。看護教育においてセルフ・エフィカシーを高めるような教育や働きかけが重要であると考えられる。

・ 謝辞

今回の研究にあたり、質問紙調査に協力をいただいた看護婦・看護学生に感謝したい。また、

研究をまとめるにあたり多大なご助言をいただいた、早稲田大学人間科学部教授の坂野雄二先生にも深く感謝したい。

・引用・参考文献

- 1) 坂野雄二他：一般性セルフ・エフィカシー尺度の妥当性の検討, 早稲田大学人間科学研究, 2(1), 91- 98, 1989.
- 2) 金外淑他：慢性疾患患者に対する認知行動的介入, 心身医学, 36(1), 27- 32, 1996.
- 3) 岡美智代他：透析患者の自己管理の自己効力尺度の開発, 日本看護学会誌, 5(1), 40- 48, 1996.
- 4) 坂野雄二：認知行動療法, 日本評論社, 1995.
- 5) 山本享子：看護学生健康認識に関する研究, 日本看護学教育学会, 6(2), 111, 1996.
- 6) 坂野雄二他：一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み, 行動療法研究, 12(1), 73 - 81, 1986.
- 7) 前掲書 1)。
- 8) 嶋田洋徳他：一般性自己効力感尺度 (G S E S) の項目反応理論による妥当性の検討, ヒューマンサイエンスリサーチ, 3, 77- 90, 1994.
- 9) 祐宗省三他編：社会的学習理論の新展開, 金子書房, 1985.
- 10) 前掲書 1)。
- 11) 鹿内啓子他：女子大生の社会的・職業的役割意識の形成過程に関する研究, 名古屋大学教育学部紀要, 29, 101- 133, 1982.
- 12) 丹沢広子他：職能および職業イメージの形成に影響する要因, 第20回日本看護学会集録 - 看護管理 -, 117- 120, 1989.
- 13) 清田敏恵：看護婦のキャリア形成過程の研究に取り組んで, 看護教育, 31(1), 2- 6, 1990.
- 14) 坂野雄二他：主張行動の形成に及ぼす Self- Efficacy 向上操作の効果, 千葉大学教育相談研究センター年報, 4, 161- 185, 1987.
- 15) 佐伯恵子他：不安の高い看護学生に対するストレスマネジメント教育, 日本看護学教育会誌, 6(2), 97, 1996.
- 16) 金外淑他：慢性疾患患者の健康行動に対するセルフ・エフィカシーとストレス反応との関連, 心身医, 36(6), 500- 507, 1996.

[1996年10月30日受理]

Abstract

The Relationship between Nurses' and Nursing Students'
General Self- Efficacy Scale Scores and their Working Experiences

Sadayo ISHIDA 1) Yoshiko MOCHIZUKI 2)

1) Sizuoka Prefectural University, Junior College

2) Odawara College of Nursing,

The purpose of this study is to clarify the relationship between the General Self-Efficacy Scale (GSES) scores and working experiences of nurses and nursing students. The General Self-Efficacy was measured by using GSES developed by Sakano and others. Two hundred sixty-six subjects including 190 nurses and 76 nursing students are studied.

The results are as follows:

1. Nurses' GSES score (Mean = 7.32, SD = 3.57) are significantly lower than the scores of average women (Mean = 9.12, SD = 3.93) ($p < .001$).
2. Nursing students' GSES scores (Mean = 8.05, SD = 4.05) are significantly higher than the scores of average students (Mean = 6.58, SD = 3.37) ($p < .05$).
3. The longer working experiences, the higher the GSES scores are among nurses. The GSES scores of nurses working more than 5 years (Mean = 7.88, SD = 3.77) are significantly higher than the scores of nurses whose working experiences are less than 1 year (Mean = 6.42, SD = 3.44) ($p < .05$).
4. Nursing students' GSES scores are higher than the scores of nurses. Especially, nursing students' scores are significantly higher than the scores of nurses whose working experiences are less than 1 year ($p < .05$).

The results indicate that the GSES becomes lower when the beginning period of nurses' professional experiences. It is essential to bring it higher among nurses. In order to make it, education plays a significant part.

Keywords: General Self-Efficacy, GSES, Nurses, Nursing Students, working experiences, nursing education

